

人間・植物関係学の胎動と展開

松尾英輔

九州大学名誉教授・元東京農業大学

e-mail : al69sa@tsm.bbiq.jp

Development of People-Plant Relationship Study in Japan

Eisuke MATSUO

*Emeritus Professor of Kyushu University,
Former Professor of Tokyo University of Agriculture*

Keywords: 園芸療法, 園芸福祉, 人と園芸とのかかわり, 国際人間植物シンポジウム

はじめに

このたびは学会賞を授与くださりましてありがとうございます。受賞講演を行うにあたって、推薦理由はさておき、いったいどのような意味で賞をいただくことになったのか、を考えていました。

本学会が結成されてやがて20年を迎えようとしていますが、大きな転機を迎えているのではないかと考えています。会員数は伸び悩み、学際性とそれともなう領域の異なる会員の多様性が魅力であるはずなのに、特定領域の会員の割合が多くなり、多様性が乏しくなっています。また研究発表にも、人間とのかかわりがよくわからないものがたまにみられるようになっていきます。端的にいえば、人間・植物関係をテーマにした学際性の良さが失われつつあるともいえるでしょう。

このことは、目前に迫った創立20周年という節目を迎えるにあたって、もう一度学会設立時の原点にかえって、今後の発展に資するにはどうすればよいか、を考えるきっかけにする話題提供の必要性を意味するのであろう、と思いました。

本学会は、「人間と植物とのかかわりについての情報交換をはかりつつ、学術成果を高めるとともに、新しい学際分野の展開、人間の幸福への活用を目指す」と学会規則 第2条（人植関係学誌）に記されています。その主旨に賛同してくださった、さまざまな領域にわたる発起人の方々の協力を得て、発足いたしました。

本日は、ここに至るまでの背景ならびに発足後の展開には、個人的に、社会的にどのような動きがあったかを紹介します。今後の発展の参考にさせていただければ幸いです。

1. 園芸領域における人間への関心

演者が学生生活を送っていた1960年代には、農学に関する授業や実習は農業生産に関係する植物やその生理に関するものがほとんどでした。演者自身もキュウリの雄花や雌花の分化を支配する環境条件について研究していました。そのなかで、ある地域の自然条件下で出てくる変異のなかから、そこに適した、役立ちそうなものを拾いあげるのは私たち人間であることに、あらためて気付きました。考えてみればあたりまえのことですが、キュウリの生態型などと呼ばれる系統の成立には人との深いかかわりがあるのです。

このような園芸分野における人とのかかわりのある事象は身近にいくらでもあるにもかかわらず、これらはほとんど取り上げられていないことに気が付き、関心をもつようになりました。たとえば、熊本以北の北部九州と違って鹿児島では、墓花が1年中きれいに飾られていますし（松尾, 1982, 1989; 日本放送出版協会, 1993）、九州におけるネギ類の方言、とくにワケギのそれは、おおむね県またはそれ以前の藩によって違ってきます（松尾, 2017）。テッポウユリの利用法は日本では花壇での栽培や切り花としての利用がほとんどです。しかし、アメリカでは主として復活祭（Easter）のときに鉢花として飾ります。つまりテッポウユリは復活祭の花（Easter flower）であり、これがテッポウユリを英語でEaster lily（復活祭のゆり、イースター・リリー）と呼ぶようになった理由です（松尾, 2017）。

そして1960年代から70年代にかけて、公害という社会的問題が話題となりました。都市には植物の姿が少なく、都市はコンクリートジャングル、アスファルト砂漠とも呼ばれました。排ガスと煤煙で空はどんより曇り、太陽は黄色に見えるような有様でした。また、食べものの農薬汚染は、都市住民に農薬まみれの食べ

2018年7月25日受付.

本稿は、人間・植物関係学会2018年大会（6月9日、西九州大学、佐賀市）で行った受賞講演の草稿に手を加えたものである。

ものを食べさせられているのではないかという不安さえいだかせることになりました。

このような社会情勢から、1970年代には国民の間に環境整備や食の安全への関心が高まり、都市緑化が推進されるとともに、家庭園芸がブームとなり、市民農園も開設されました。そのとき疑問を感じたことの1つは、30%を超える国民が何らかの形で園芸・庭いじりに親しんでいるというのに、園芸研究者の目はそれに向けてはいなかったことでした。

ちょうどそのころ、演者は地理学関係の勉強を始めていました。そこで学んだことは、地理に関心をもつさまざまな領域の研究者が人とのかかわりを研究課題として取り上げていることでした。これに力を得た演者は、前に述べました墓花、ネギ類の方言、市民農園、家庭での園芸の実態など、人と園芸とのかかわりである事象の解明に本気で取り組むことになりました。園芸領域における人とのかかわりの分野の認知、すなわち、生活科学としての園芸の確立を目指したのです。

経済の高度成長がピークに達する1980年代になると、農・園芸領域にとっては受難の時代となりました。農産物の輸入が自由化され、安価な外国産の農産物が国内にあふれ、国産の農産物の販路を圧迫するようになりました。その影響もあって農家数が減少し、国や地方自治体の農業関係部局は規模縮小を迫られ、大学では「農消し」といわれる農学部の再編が始まりました(松尾, 2010)。そのころ話題になったのが、農耕・園耕がもっている水源涵養、緑の景観の創造と維持、緑の環境がもたらす心理的効果、環境変化の緩和などの環境的役割です。

これを市民生活における花と緑の環境的役割ととらえて、植物とのかかわりの大切さを市民に訴えたのが、1990年に開催された花の万博です。同じ年には園芸学会が、第24回国際園芸学会議(The 24th International Horticultural Congress; IHC)を1994年に京都で開催することを決定し、そのモットーは“The Beautification of Human Life and Its Environment through Horticultural Science”(健やかな人間生活と美しい環境を創る園芸)とすることになりました。この国際園芸学会議を契機に、園芸学会でも園芸領域における人間問題への視線に変化がみられるようになりました。

2. アメリカやイギリスでの人間・植物関係領域の動向

アメリカでは1900年代初めころから、園芸の療法的活用が盛んになっていましたが、第2次世界大戦後にはよりいっそう注目されるようになりました。そして1973年には、アメリカ園芸療法協会の前身である“The National Council for Therapy and Rehabilitation through Horticulture; NCTRH”(園芸を通しての治療とリハビリテーションに関する全国協議会)が結成さ

れました(京都大学蔬菜花卉園芸学研究室, 1982)。これは1987年に改称して“The American Horticultural Therapy Association; AHTA”(アメリカ園芸療法協会)となります。

イギリスでは、1978年に“Horticultural Therapy; HT”(日本ではイギリス園芸療法協会と呼ばれていました。)が結成され、主に情報ネットワークとして活動し、園芸療法の実習を行い、終了証書を出していました。その後1999年に“THRIVE”と改称して現在に至り、日本にも連絡所がおかれています(松尾, 2008)。

1970年前後のアメリカでは、モートン植物園(イリノイ州)にいたC. Lewis氏が、人間に対する植物の効果や役割について研究を進めています。NCTRHの事務局長を務めていたP. D. Relf博士はこれに共鳴し、バージニア工科大学に職場をかわってから本格的に人間と園芸・植物とのかかわりを研究することになりました。

このような園芸分野における人間問題を取り上げる作業部会(W.G.)が、1980年代に入って、アメリカ園芸学会(The American Society for Horticultural Science; ASHS)のなかに続々と立ち上げられています(Matsuo, 1996)。たとえば、家庭園芸(1980)、園芸における女性の役割(1980)、家庭と都市における園芸(1983)、花卉園芸教育(1983)、社会園芸と園芸療法(1983)、社会園芸(1984)、園芸史(1989)、消費者園芸(1990)、園芸分野における人間問題(1991)などがあります。

Relf博士は、1976年にバージニア工科大学に転じた後、1981年のアメリカ園芸学会で、シンポジウム“Consumer Horticulture: A Reality for All Horticulture”を主宰し、Home Horticulture(家庭園芸)W.G.をConsumer Horticulture(消費者園芸)W.G.と改称することを提唱しています。また、1989年には“The Interdisciplinary Research Team of the Office of Consumer Horticulture; IRTCH”を結成し、このグループが中心となって1990年に人間・植物シンポジウム(The National People-Plant Symposium)を開催しました(松尾, 1997)。この会議は第1回人間植物シンポジウムと位置付けられ、以降原則として2年ごとに開催されることになり、1996年の第4回大会以降“The International People-Plant Symposium; IPPS”と呼ばれることになりました(松尾, 1997)(第1表)。

Relf博士との交流は、演者が1980年ころに園芸療法に関する資料の提供を要請したことをきっかけに始まりました(第2表)。博士に初めて会ったのは1986年第22回国際園芸学会議(カリフォルニア大学デービス校)でのことでしたが、その後さまざまな面で博士の支援を受けています。とくに本学会の発足とその後の活動にあたっては、多くの助言と協力を仰ぐことにな

第1表. 国際人間・植物シンポジウムの記録 (1990~2018).

大会 ²	開催年	場所	シンポジウムのタイトル
①	1990	Arlington, VA, USA	The Role of Horticulture in Human Well-Being and Social Development
2	1992	East Rutherford, NJ, USA	People Plant Relations: Setting Research Priorities
3	1994	Davis, CA, USA	The Healing Dimensions of People-Plant Relations
④	1996	San Antonio, TX, USA	People-Plant Interactions in Urban Areas
⑤	1998	Sydney, Australia	Towards a New Millennium in People-Plant Relationships
⑥	2000	Chicago, USA	Interaction by Design : Bringing People and Plant together for Health and Well-Being
⑦	2002	Toronto, Canada	Expanding Roles for Horticulture in Improving Human Well-Being and Life Quality
⑧	2004	Awaji, Japan	Exploring Therapeutic Powers of Flowers, Greenery and Nature
⑨	2006	Seoul, Korea	Horticultural Practices and Therapy for Human Well-Being
⑩	2010	Nova Scotia, Canada	Digging Deeper: Approaches to Research in Horticultural Therapy and Therapeutic Horticulture
⑪	2012	Venlow, The Netherland	Diversity: Towards a New Vision of Nature
12	2014	Brisbane, Australia	Horticulture and Human Communities: People, Plants and Places
13	2016	Montevideo, Uruguay	Plants, Cultures and Healthy Communities
14	2018	Malmö, Sweden	Nature-based Solutions: Promotion, Preventions and Interventions for Health and Well-being

²数字を○で囲んだ大会では演者も発表した。

第2表. 第8回国際人間・植物シンポジウム (2004) までの, Relf博士との主な交流記録.

年	事項, 場所など
1980頃	園芸療法の資料請求をきっかけに交流が始まる
1986	第22回国際園芸学会議(カリフォルニア大学デービス校)で初めて会う
1990	人間・植物シンポジウム(バージニア州アーリントン)に参加
1993	鹿児島大学大学院の招へい研究員として来日
1994	第24回国際園芸学会議(京都)に基調講演者として参加
1996	第4回人間・植物シンポジウム(テキサス州サン・アントニオ)に参加
1997	バージニア工科・州立大学で, 人間・植物関係研究者の会合
1998	第5回国際人間・植物シンポジウム(シドニー工科大学)に参加
2000	日本学術振興会短期招へい研究者として来日 人間・植物関係学会準備会発足記念シンポジウム(東京)で講演
2004	第8回国際人間・植物シンポジウム(淡路)の基調講演者として招待

りました。

Relf博士と共同して行った初仕事は, 1994年に京都で開催された第24回国際園芸学会議におけるモットー

に沿ったシンポジウム“Horticulture in Human Life, Culture, and Environment”(豊かな人間生活, 文化の発展, 快適環境の創造にかかわる園芸)の編成, 遂行そ

して報告書（論文集）の作成です。演者らのほかに、5人の基調講演者を招待し（第3表）、園芸の多彩な分野へのかかわりとその効用、ならびにその応用について討議しました。それらの結果は、Acta Horticulturae No. 391（Matsuo and Relf, 1995）として刊行されています（写真1）。

3. 日本における人と園芸・植物関係研究と人間・植物関係領域の啓発と普及に貢献した外国人研究者たち

1980年代までは、奇人・変人扱いされた人間・園芸関係の研究でしたが、前に述べましたように、1994年の国際園芸学会議以降は風向きがやや変わってきました。これまでは人間とかかわる園芸に関心をもっているながら口をつぐんでいた人が発表するようになったのです。とはいえ、これらは学会ではまともに評価されているとはいえませんでした。それでも、暮らしのなかにおける園芸も、園芸分野の1つとして欠かせないという信念のもとに、さまざまな話題を取り上げて研究を進めてきました（第4表）。

このような農・園芸分野において人間とのかかわりを考える話題は、日本学術振興会には評価されたようです。1990年代から2000年代にかけて申請した外国人研究者の招へい計画7件（第5表）と科学研究費助成（研究代表者）に申請した3件の研究課題（第6表）

はすべて採択されました。

この日本学術振興会の助成のおかげで、1994年の国際園芸学会議の基調講演者のうち、Relf教授、Groening教授、Burchett教授のほかに、第6回までの国際人間植物シンポジウムで注目される研究発表

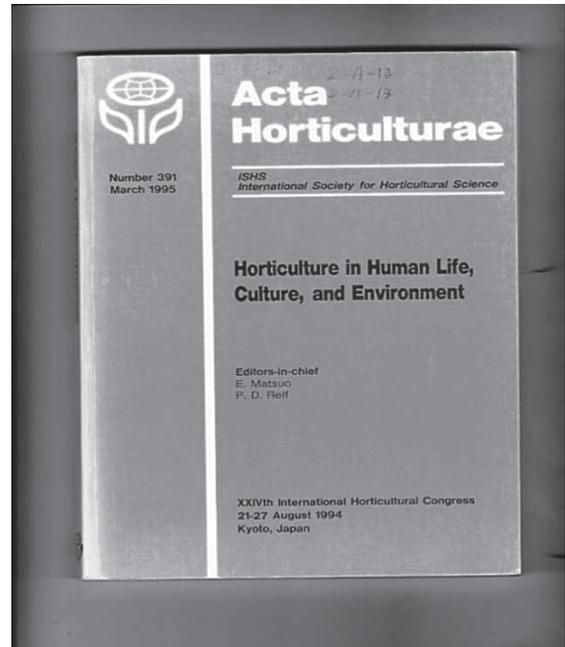


写真1. Acta Horticulturae No. 391 “Horticulture in Human Life, Culture, and Environment” の表紙

第3表. 第24回国際園芸学会議（1994, 京都）のシンポジウム“Horticulture in Human Life Culture, and Environment”（豊かな人間生活、文化の発展、快適環境の創造にかかわる園芸）の基調講演者とタイトル。

講演者	タイトル
Mtsuo, E. (日本)	Horticulture helps us to live as human beings: Providing balance and harmony in our behavior and thought and life worth living 園芸活動は私たちが人間として生きることを可能にする
Lewis, C.A. (アメリカ)	Human health and well-being: The psychological, physiological, and sociological effects of plants on people 健康と幸福に対する園芸の役割: 心理的, 生理的, 社会的効果について
Zhou, W.Z. (中国)	The role of horticulture in human history and culture 暮らしのなかの園芸にみる文化的側面
Groening, G. (ドイツ)	School garden and kleingarten: For education and enhancing life quality 学校園とクラインガルテン: 教育と豊かな暮らしのために
Stoneham, J.A., A.D. Kendle and P.R. Thoday (イギリス)	Horticultural therapy: Horticulture's contribution to the quality of disabled people 園芸療法: 身体的, 精神的健康の回復を目指して
Burchett, M.D. (オーストラリア)	Horticultural aspects of environmental issues in urbanized society: -The gardens as a model for caring for The earth-K2 都市化社会の環境問題における園芸的側面: 地球を守るモデルとしての庭
Relf, P.D. (アメリカ)	The significance of horticulture-human interaction to the horticulture industry and researchers 企業や研究者にとって園芸-人間問題の研究はなぜ必要か

をしていた R. Ulrich教授, C. Shoemaker博士, V. Lohr教授を新たに招くことができました(第5表)。彼らは、日本各地で講演を行ったり、セミナーに参加したりして人間・植物関係学領域の啓発・普及に大きな役割を果たすことになりました。来日外国人研究者たちが国内各地を訪問した際にお世話して下さった方々に、この機会を借りてあらためてお礼を申し上げます。

これら多くの外国人研究者との交流の影響もあり、演者の関心は人と園芸とのかかわりから、人と植物とのかかわりへと広がることになりました。

4. 園芸療法の普及と園芸福祉の提唱

1990年代後半には、園芸療法に対する国民の関心が異常ともいえるほどに高まってきました。園芸療法に関する情報は爆発的に増加し、研究会・勉強会は全国各地に結成され、講演会やセミナーが急増しました(松尾, 1998, 2005)。

そのような背景を受けて、園芸療法とは何かがわかりにくくなり、混乱もみられるようになりました。たとえば、植物を取り

扱っていけば園芸療法、療法の対象者は誰でもよい、治療やりハビリテーションだけでなく、心身の状態がよくなればそれは園芸療法の効果であるというような極端な解釈も出てくるようになったのです。

もともと園芸は多くの恩恵・効用を私たちにもたらしてくれます。花を見ればほっとするし、安らぎが得られます。野菜の手入れをするのは面白いし、喜びも

第4表. 演者が取り組んだ、人と園芸・植物とのかかわりに関する主な話題.

ネギ類の方言	園芸療法の紹介・啓発
墓花	色名となっている植物
家庭園芸	施設・病院・学校等での園芸活動
市民農園・クラインガルテン	好きな花, 嫌いな花とそのイメージ
門前・玄関前の植物	園芸福祉の提唱
JR駅プラットホームの植物	七草の知名度
農芸教育の提唱	復活祭のゆりEaster lily
TV, ラジオにみる園芸情報	社会園芸学とは

第5表. 文部省外国人招へい研究者, 日本学術振興会招へい研究者(短期)として来日し, 人間・植物関係研究の啓発・普及に尽力した外国人研究者.

採択年度	招へい研究者	所属・職	事業名 ²	研究課題
1992	P.D. Relf	バージニア工科・州立大学准教授(米国)	A (鹿児島大学大学院連合農学研究科外国人客員研究員)	
1994	C.A. Lewis	元モートン植物園研究員(イリノイ州, 米国)	B	コミュニティにおける園芸, 造園活動の役割 Role of horticulture in human community
1997	R. Ulrich	テキサスA&M大学教授(米国)	B	人間に対する植物の心理的, 生理的効果とその応用に関する研究 Study on the psychological and physiological effects of plants on people and their application
1998	M. Burchett	シドニー工科大学教授(オーストラリア)	B	園芸植物による身近な空気汚染のモニタリングと汚染の除去に関する研究 Monitoring air pollution of our nearby environment such as indoor and its reduction by living plants
1999	G. Groeing	ベルリン芸術大学教授(ドイツ)	B	教育, 文化, 環境に果たす市民農園と講演の役割 Role of Kleingarten in education, culture and environment
2000	P.D. Relf	バージニア工科・州立大学教授(米国)	B	園芸療法と園芸福祉—人間・植物関係の視点から Horticultural therapy and horticultural well-being in relation to People-Plant relationships
2001	C. Shoemaker	シカゴ植物園・同園芸専門学校校長(申請時), 来日時にはカンザス州立大学准教授(米国)	B	人間・植物関係の研究における方法論の探索と確立に関する研究 Research and development of methodology in people-plant relationship studies
2004	V. Lohr	ワシントン州立大学教授(米国)	B	人間・植物関係の心理・生理的把握に関する情報交換と問題点の解決 Exchange and analysis of psycho-physiological indices on the influence of people-plant relationships

²事業名

A 文部省教育研究交流事業(国際交流事業)参加のための外国人研究者招へい制度.

B 日本学術振興会外国人招へい研究者(短期).

第6表. 日本学術振興会の助成を得た研究².

年度	種類	研究課題
1994-1996	一般研究(C) 基盤研究(C)(2)	心身の健康に対する園芸活動とその生産物の効果
1999-2001	基盤研究(B)(1)	福祉施設, 医療施設等における健康法, 療法としての園芸の活用に関する調査研究
2000-2002	萌芽的研究	農・園芸活動が果たす農芸教育的役割に関する研究

²これらの報告書は国立国会図書館と九州大学図書館に収められている。

楽しみもあり, 買った野菜よりおいしく感じられます。成長や開花, 収穫への期待や希望も生まれます。子どもと植物の世話をしながら, いろいろなことを学びかつ教えることができます。家族間のコミュニケーションも円滑になります。園芸は友だちができるきっかけにもなります。高齢者にはよい運動になります。

このようなしあわせ体験は, 老若男女をとわず, すべての人が味わうことのできるもので, 病人や障がい者だけのものではありません。これらは昔から知られていたことですが, 誰もがあたりまえとっていて, 注目していなかっただけなのです。しかも, これらをあらわす適切な言葉がありませんでした。

実は, しあわせ, さいわい, 幸福を意味する言葉が福祉です。そこから, 園芸を通してしあわせ, すなわち, 福祉を推進しようという意味で, 園芸福祉という言葉が生まれました(松尾, 1998)。

園芸福祉という言葉が生まれると, その活動はいちはやく三重県で取り上げられ, 爆発的に日本中に広がりました。ずっと以前からは知られてはいたものの, 適切な言葉がなく, あたりまえととらえて, 注意を払ってこなかった園芸の恩恵に「園芸福祉」という衣を着せることによって, 初めて一般市民の意識に上るようになったといえるでしょう。馬子にも衣装というところでしょうか。

このような園芸福祉という概念に基づいて, 園芸療法とは何かを考えてみますと, 園芸を通して療法的かわりを要する人のしあわせ(福祉, 幸福)をはかること, ということになります。つまり, 園芸療法は園芸福祉のなかの1つの領域なのです。

園芸療法への関心の高まりにともなって出てきた話題が, 園芸療法を職業として活かすために, 園芸療法士の資格制度を整備してはどうか, というものでした。これと連動して園芸療法学会を組織してはどうかという声が聞こえるようになりました。

5. 人間・植物関係学会の発足とその後の活動

このような要請を受けて, 1999年7月に大阪で, 園

芸療法の啓発・普及・実践にかかわってきた浅野房世氏, 澤田みどり氏, 鈴木正明氏, 山根 寛氏(アルファベット順)に演者を加えて協議をしました。その結論は, 園芸療法を日本にしっかりと根付かせるには, その基礎となる人と植物との関係を学び・理解することを優先すべきである。それを実践するために, まず人間・植物関係に関する学会を立ち上げ, その学会の

なかで, 園芸療法を学びつつ, 独立学会発足の機会を模索しようではないか, ということになりました。

この決定にしたがい, ほぼ1年をかけて学会発足の準備を進め, 2000年10月に人間・植物関係学会設立準備会発足記念シンポジウムを東京で開くことになりました。このとき講演を快諾していただいたのが, P. D. Relf博士(バージニア工科・州立大学教授)「人間と植物のかかわりの解明と応用」と河合雅雄博士(兵庫県人と自然の博物館館長)「人はなぜ自然を求めるかー人と自然の真の共生とは」でした。いずれも学会の発起人として名を連ねてくださった方々でした。

本学会の理念は学会規則に謳ってありますように, 幅広くさまざまな分野の人々が集まって, 人と植物とのかかわりに関する情報交換を行い, 研究を進め, それらの結果を活用しながら, 私たち人間のしあわせを推進して行こうというものです。この趣旨には, さまざまな学問分野で活躍しておられる著名な方々が賛同して, 発起人として名を連ねていただきました(人植関係学誌, 表紙裏)。

これらの方々の協力を得るとともに, 準備会発足記念シンポジウムや学会運営の資金を調達するにあたっては, 浅野房世現会員, 高江洲義英現会員の尽力に負うところが絶大でした。その後の運営に関する基本的な姿勢は, 自分たちが勉強するための学会であるから, 自分たちが資金を出し合って運営するというものでした。

こうして2001年9月に人間・植物関係学会が発足し, 最初の学術研究発表会を「人と自然の博物館」(兵庫県三田市)で開催する運びとなりました。発足後は, 数多くの会員の皆さんのご尽力で, 営々と継続されてきました。学会雑誌が発行され, 研究発表, 公開講演が毎年行われています。そしてやがて20年を迎えることとなります。

この間に行われたさまざまな活動の様子は, 本学会雑誌に掲載されております。なかでも新しい会員にはよく知られていないと思われる学会創立から初期10年の活動の様子は, 創立10周年を機会にまとめられ, 学

会雑誌第10巻（人植関係学会，2011）に掲載されています。この記録は発足当初から幹事として学会事務を取り仕切ってくださった森 啓一郎会員の手によるものです。

6. 特筆すべき出来事

研究発表と啓発・普及を目的とした公開講演は恒例行事として行われてきましたが、これまでの活動のなかで特筆すべきものといえば、第8回国際人間植物シンポジウム&園芸療法国際サミット（淡路）、日本園芸療法学会の発足、創立10周年記念シンポジウムがあげられましょう。第8回のシンポジウムではポスターに「人間植物関係学国際シンポジウム」と記されていますが、本稿では英文表記に従って「国際人間植物シンポジウム」という訳を用いることにします。

国際人間植物シンポジウムは、1990年から2年ごとに開催される人と植物に関する国際会議です（第1表）。主にアメリカで行われてきたのですが、それ以外の国で行われたのは、1998年のシドニー大会（オーストラリア）と2000年のトロント大会（カナダ）だけでした。その第8回目にあたる国際会議を、2004年にアジアで初めて日本で開催することになったのです。

実は、1996年の第4回大会（サン・アントニオ，テキサス州）の折に、日本で開催してはどうかという打診を受けたのですが、日本はまだそれをできる状態ではない、と断ったことがありました。人間・植物関係学会が発足したのを機会に、日本における人間・植物関係研究と実践の状況を世界に向けて発信すると

もに、国内での啓発・普及をはかろうというわけで、2004年の第8回大会を誘致し、「人間・植物関係学国際シンポジウム&園芸療法サミット」という形で開催することになりました。

この国際会議は、高江洲義英実行委員長と浅野房世大会事務局長のご尽力のもと、兵庫県による人的および資金面での支援、さらにはP. D. Relf教授（バージニア工科・州立大学）、M. Burchett教授（シドニー工科大学）の協力を得て、成功裏に終わりました。このシンポジウムの成果は、Acta Horticulturae No. 790 “Exploring Therapeutic Powers of Flowers, Greenery and Nature”（花と緑、そして自然の療法的力を探る）（Matsuo, Relf and Burchett, 2008）にまとめられています（写真2）。

本学会の設立にあたって、検討課題として後回しになっていた、園芸療法学会については、学会内の研究部会で調査・研究が進められていました。発足後には学会内部に園芸療法に関係する会員が徐々に増え、研究発表も多くなり、より専門的な教育・研究と教育制度の確立の必要性が感じられるようになりました。こうしてまず2004年に園芸療法士の資格制度が整備され、続いて2008年には日本園芸療法学会が設立されることになりました。これにともない、本学会による園芸療法士の資格制度は、日本園芸療法学会に移譲されました。

創立10周年記念シンポジウムは、自然と人間とのかかわりを象徴する熊野古道が世界文化遺産に登録されている（2004年）こともあって、自然に恵まれた熊野

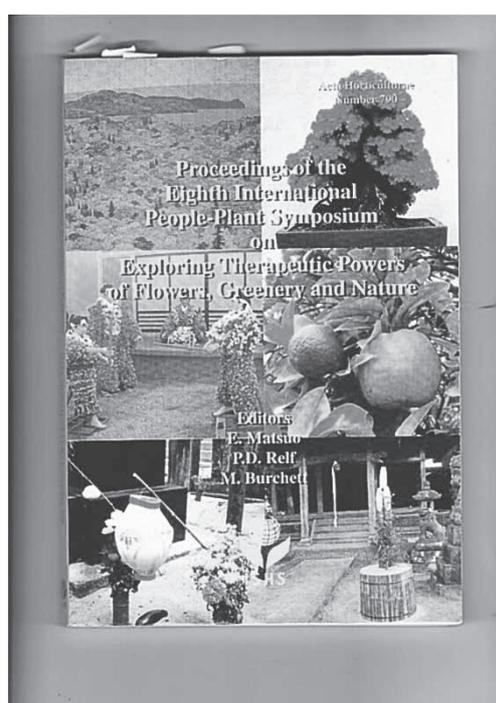


写真2. 第8回国際人間植物シンポジウムのポスター（左）とその論文集 Acta Horticulturae No.790の表紙（右）。

市周辺での開催が検討されました。しかしながら、交通事情の面で難点があるというので、断念することになりました。それに代わる案が、奈良市の春日大社という精神性に富む原生林のある場所での開催です。いずれも当時学会長を務めていた浅野房世会員の発案によるものですが、そのアイデアの豊かさに驚きました。2010年5月に開催されたのですが、あいにくの雨にたたられ、参加者が少なかったのはきわめて残念なことでした。

おわりに

“No Plant No Life”という言葉は、人は植物なしには生きられない(Without plant, we would not survive.)、と言い換えられることもあるのですが、今後とも変わることのない真実でしょう。

植物は食べもの、住まい、衣料、医薬類の原料となるだけでなく、緑の環境、精神生活、社会生活、教育・文化、心身の健康などさまざまな面で影響をもたらし、私たちに癒しと喜び・楽しみ、さらには期待や希望を与えてくれます。このとき私たちは心地よさ、すなわち快感を味わい、しあわせに生きていることを実感できるとともに、心身だけでなく社会的にも健康かつより質の高い暮らしをすることができるのです。

それらの諸現象が私たちの身の周りでのどのような形であらわれているかを明らかにし、その背景を探り、それをしあわせで健康な暮らしにいかにか活かして行くかを、模索するのが人間・植物関係学にはかなりません。

この領域で学び、あるいは、研究し、実践に携わっている皆さんには、今後も自信をもってその仕事に取り組む、さらなる発展と深化を目指して頑張っていたきたいと祈念しています。

講演の資料作成にあたってご協力をいただいた、P. D. Relfバージニア工科大学名誉教授とC. Shoemakerカンザス州立大学教授にお礼を申し上げます。

ご清聴ありがとうございました。

参考文献

京都大学蔬菜花卉園芸学研究室. 1982. 園芸を通じた治療とリハビリテーション. 新花卉 No. 113 : 28-29.

松尾英輔. 1982. 墓花にみる奄美大島の地域性. pp. 378-385. 九学会連合奄美調査委員会(編). 「奄美-自然・文化・社会-」. 弘文堂. 東京.

松尾英輔. 1989. 墓花に関する研究 1. 鹿児島市唐

湊墓地における年間の使用切り花の実態と分析. 鹿児島大学農学部学術報告 39 : 309-318.

松尾英輔. 1997. 園芸と人間とのかかわりを探る (2). - 社会園芸学とは何か -. 農業および園芸 72 (10) : 1065-1070.

松尾英輔. 1998. 園芸福祉(学)の提唱. グリーン情報 19(1) : 61.

松尾英輔. 1998, 2008. 園芸療法を探る 癒しと人間らしさを求めて. グリーン情報. 名古屋市.

松尾英輔. 2005. 社会園芸学のすすめ 環境・教育・福祉・まちづくり. 農文協. 東京.

松尾英輔. 2008. 「福祉」の解釈を探る - 園芸福祉と園芸療法との関係をよりよく理解するために -. 人植関係学誌. 7(2) : 23-30.

松尾英輔. 2010. 農芸教育の提唱 (5) 学校教育における指導者不足の背景. 日本農業教育学会誌 41 (2) : 75-84.

松尾英輔. 2017. 人と植物とのかかわりを探る [14] 復活祭の白ユリ “Easter lily” という英語名をもったテッポウユリ. 農業および園芸 92(11) : 950-958.

松尾英輔. 2017. 人と植物とのかかわりを探る [15] 九州地方におけるネギとワケギの呼称. 農業および園芸 92(12) : 1037-1045.

日本放送出版協会. 1993. 研究室を訪ねて: 墓花に関する研究 鹿児島大学農学部観賞園芸学研究室. 趣味の園芸 1993. 3. : 94-95.

人間・植物関係学会. 2011. 人間・植物関係学会創立10周年記念特集 I. 学会10年の歩み. 人植関係学誌. 10(2) : 41-68.

人間・植物関係学会. 2011. 人間・植物関係学会創立10周年記念特集 I. 学会10年のあゆみ. 人植関係学誌. 11(1) : 25-31.

Matsuo, E. 1996. Sociohorticulture: A new field of horticulture and its present status in Europe, the U.S.A. and Japan. J. Kor. Soc. Hort. Sci. 37(1) : 171-185.

Matsuo, E. and P. D. Relf.(eds.).1995. Horticulture in human life, culture, and environment. Acta Horticulturae No. 391. International Society for Horticultural Science.(Publisher) .

Matsuo, E., P. D. Relf and M. Burchett.(eds.).2008. Exploring therapeutic powers of flowers, greenery and nature. Acta Horticulturae No. 790. International Society for Horticultural Science.(Publisher) .